

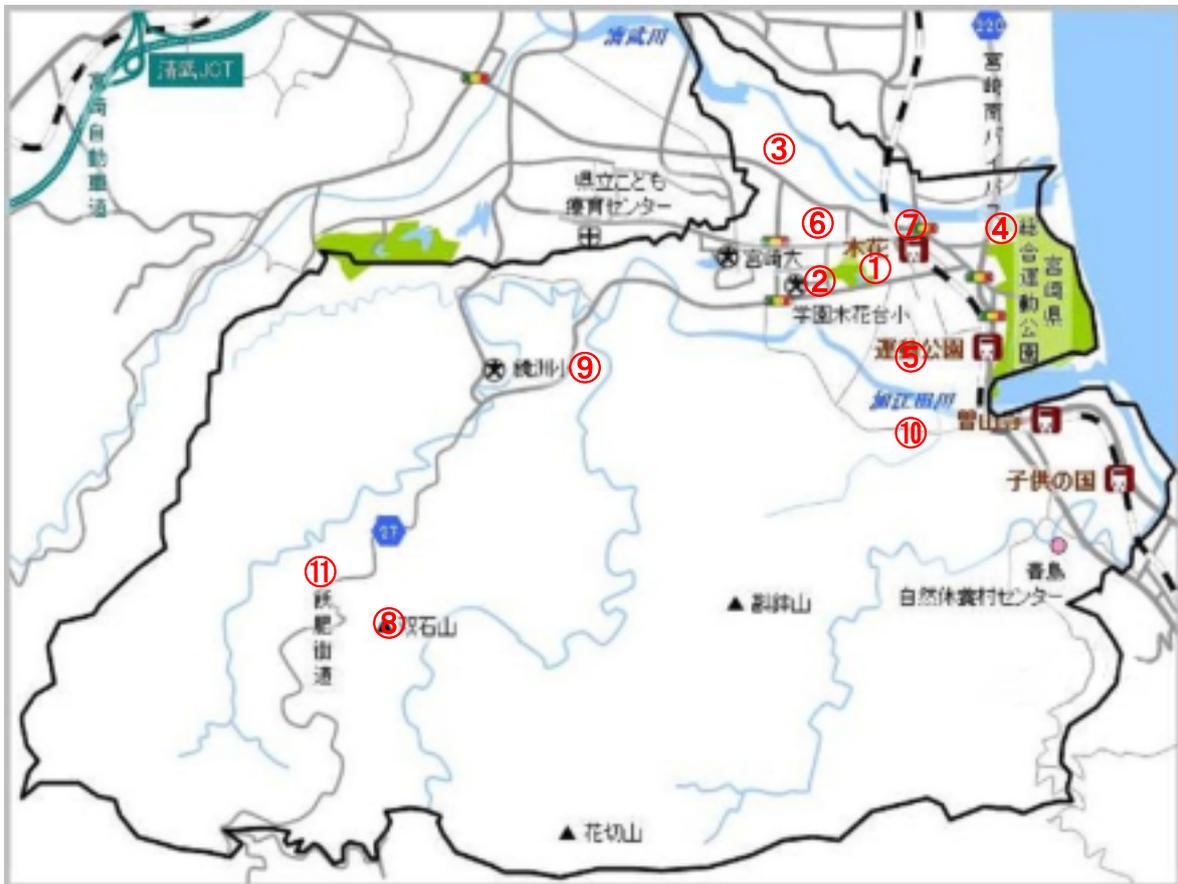
木花地域の文化遺産 (木花地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

建久8年(1197)作成の「日向図田帳」に、「隈野八十丁」「鏡淵六十丁」と記されています。古代～中世にかけての木花地域一帯は、八条女院(鳥羽天皇の第3皇女)領国富庄(くどみのしょう)の一部に含まれ、南北朝期の永和4年(1378)頃には、伊東惣領家の祐重・祐安の所領となっていました(『日向記』)。

近世には、隈野村・鏡洲村・加江田村として飢肥藩領となりましたが、寛文2年(1662)の大地震(いわゆる外所地震)によって、高2,525石余(隈野村533石余、加江田村1,460石余)が海没し、木花地域の様相も大きく変わりました。

【文化遺産マップ】



きばなじんじゃ

① 木花神社

標高40m程の木花ヶ丘の南端に、ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの夫婦神を祀る木花神社があります。

創建は不詳ですが、永禄5年（1562）に伊東義祐が記した『飢肥紀行』の中に木花神社のことが記されていることから、その頃にはすでに祀られていたと考えられます。

別名「木花の権現さま」とも呼ばれ、神社内に残る宝暦5年（1755）の棟札には、「開耶姫（さくやひめ）大権現」と記されています。

社殿内に5枚残る何れの棟札にも歴代飢肥藩主の武運長久の願文が記されていることから、飢肥藩主に対する地域住民の崇敬の厚さがうかがえます。



もくそうあみだによらいりつそういっく

📷 木造阿弥陀如来立像一軀（市有形文化財）

木花神社境内の西隣には、木花山法満寺がありました。現在は、その名残を偲ぶ石塔群とともに木造阿弥陀如来立像一軀を安置する仏堂だけが残されています。

本像は、像高99.0cm、螺髪（らはつ）に衲衣（のうえ）を纏い、蓮華座に立って来迎印を結んでいます。

複数の木を組み合わせる寄木造りで作られ、漆の上から金箔を貼り付ける漆箔（しっばく）、目には水晶体をはめ込む玉眼（ぎょくがん）といった技法が使われています。

これらは、東大寺南大門の仁王像を作った鎌倉時代初期の仏師快慶の作風に習ったもので、いわゆる安阿弥陀様の弥陀立像の一例です。

衣褶（いしゅう）がやや形式的に流れる特徴から鎌倉時代中期以降の造立と考えられ、県下に数少ない鎌倉彫刻の一例として貴重なものといえます。



れいせんさくらがわとしそうぼさつりつそう

📷 霊泉桜川と地藏菩薩立像

木花神社の参道階段脇に霊泉桜川があります。

この泉は、邇邇芸命と木花佐久夜毘売が出会ったとの言い伝えが残る場所として知られ、民話「桜子物語」の舞台にも登場します。

この泉の南側の一角に、古城村（現宮崎市古城）出身の仏師串間円立院作の地藏菩薩立像があります。

円立院は、真言宗護東寺の住職で、修験者として峰入り修行などを行い、修行の一環として数多くの石像を制作しました。

円立院が残した石像は、宮崎市内を中心に、現在362体が確認できますが、この地藏菩薩も修行の一環として彫られたものと考えられています。



かえだじんじゃ
② 加江田神社

祭神はアマテラスオオミカミ・イザナギノミコト・イザナミノミコトで、古くは伊勢神明宮・天照皇大神宮と称しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には、加江田伊勢領の代官寄進所として、「加江田上分」「同所下分」などに合わせて屋敷2ヶ所と1町9段半の田地が社領として記されています。

「上井覚兼日記」によれば、宮崎地頭上井覚兼も度々同社を訪れており、天正11年（1583）5月21日には、肥前島原で疫病が流行したため、覚兼は部下の病除けのため伊勢で奉射千矢の立願をしています。

元の社殿は加江田の元伊勢にありましたが、寛文2年（1662）の大地震（外所地震）によって海中に没したため、翌年現在の地に遷座されました。

江戸時代には飢肥藩主の崇敬厚く、神殿・祭具等には伊東家の紋が彫られ、毎年2、6、9月の例祭には藩主自ら参拝しました。



きばなそんこふん
③ 木花村古墳（県史跡）

清武川と県道338号線に挟まれた畑中に、前方後円墳2基（1号墳と2号墳）と円墳1基（4号墳）が現存します。

1号墳は墳長58m、葺石はありますが埴輪は確認されていません。『木花郷土史』によれば、昭和の初期、後円部とくびれ部の境から石棺が発見され、鉄刀が出土したとあり、近年、後円部で片面に赤色顔料を塗布した板石が確認されていることから、石棺は板石組合せの箱形構造と考えられます。

2号墳は、墳丘の改変が著しく、詳細は不明ですが、現状では墳長43mを測り、葺石と円筒埴輪が認められます。



とんところおおじしんくようひ
④ 外所大地震供養碑

寛文2年（1662）9月19日に起きた日向国最大の地震（マグニチュード7.8）は、有史以来例のない大地震として伝えられています。

その惨状はすさまじく、この時海寄りにあった外所村が海中に沈みました。また、『日向纂記』によれば、飢肥城（現日南市）の石垣9箇所が崩れ、堀が2箇所埋まるなど、古今未曾有の大災と記されています。

寛文の大地震は、海中に沈んだ外所村に因んで「外所地震」とも呼ばれています。国道220号線沿いの島山では、およそ50年毎に供養碑が建てられ、当時被災した人々の供養が行われています。



しょうれんじつつみ
⑤ 正蓮寺堤

外所地震によって、木花ヶ丘麓の正蓮寺平野は入海となってしまいました。

その後、入江の海は洪水の度に土砂に埋まり、しだいに泥沼となってきました。そのため、享保年間（1716-36）に島として残っていた島山を基点として、外海と区画する堤防が築かれました。これを正蓮寺内堤といいます。さらに、100年後の文政年間（1818-30）に、その外側に築かれた堤防を正蓮寺外堤と呼びます。

内堤の完成には19年、外堤は11年と長い歳月がかかりましたが、この2度にわたる大工事によって、正蓮寺平野は外所地震で失われた水田地帯を取り戻しました。

現在、「正蓮寺」「新正蓮寺」「外新正蓮寺」の地名が残っています。



現在の正蓮寺平野

くまのじんじゃ
⑥ 熊野神社

社伝によれば、弘文天皇（大友皇子のこと、即位したかどうかは不明）の頃（約1,340年前）、紀伊国の熊野神社のご神霊を勧請したのが創建で、この熊野神社に由来して熊野の地名が起ったと伝えられています。

江戸時代までは、山王大権現と称し、藩政時代は、加江田神社と並んで旧清武郷五社宮の一つとされていました。飢肥藩主の崇敬厚く、社領は3石7斗で、大祭日には藩主が必ず参拝したと伝えられます。

明治維新の際に熊野神社と称し、明治25年（1892）に西の原より現在地に遷座しました。

熊野神社の祭礼で舞われ、祭りを盛り上げた踊りに木花相撲踊りがあります。由来について詳しい記録は残されていませんが、江戸末期頃、宮崎に地方巡業に訪れた大相撲一行から離れた3人の力士が木花地区の農家に住み着くようになり、この3人が踊って見せたものを女子に教え込んだのが始まりだと伝えられています。

相撲の形を取り入れた踊りを、小唄風に歌われる相撲甚句に合わせて踊るもので、現在は木花小学校の児童たちによる同好会が設立され、大人から子どもまで幅広い世代で伝承活動に取り組んでいます。



民俗芸能 木花相撲踊り(市無形民俗文化財)



さいきょうじ

⑦ 西教寺

外所山西教寺と称し、浄土真宗本願寺派に属します。

慶長元年（1596）、道源法師によって外所村に創建されますが、寛文2年（1662）の外所地震によって海中に水没しました。その後一度今江に移った後、天和元年（1681）に現在地の熊野に再建されました。島山の外所地震の供養碑の横には、道源法師の墓が残されています。

西教寺2代目住職の道和法師（のちに刀工として和泉守国貞を名乗る）の二男、井上真改は新刀の五大名工の一人と呼ばれた人物で、京都の藤原国壽に鍛刀を学びました。初め和泉守国貞（2代目国貞）を名乗りますが、熊沢蕃山の勧めにより真改と改めました。

真改は、一刀を鍛える度に百鍛して後に心になわぬものは之を投げ捨てたといわれ、鍛錬した刀身の地鉄が麗しく、銚（にえ）のよさ、刃の上のすずしさ、彫物の手際、銘の手蹟は五大名工の中でも抜きん出ていたと言われています。

その作刀の素晴らしさは、寛文元年（1661）、朝廷に作品を献じた際、賞賛を受けて十六葉菊花紋を入れること許されたほどで、後に新刀正宗又は大坂正宗と世の人々にうたわれました。



井上真改作「籠つる瓶」
（宮崎市安井息軒記念館蔵）

ぼろいしやま

⑧ 双石山（国天然記念物）

木花西北部にある双石山は、海拔509m、中腹から頂上まで砂岩や礫岩でできている急峻な山で、長年の浸食によって様々な奇岩や絶壁が見られます。

全域が常緑広葉樹林として覆われており、構成種は113科570種が記録されています。特にシダ類が豊富で、南方系シダ類の宝庫と呼ばれる一方、南限植物も自生しています。また、林内には1属1種の哺乳動物として貴重なヤマネや亜熱帯系のミカドアゲハなどが生息しているなど、自然が多く残されている大変貴重な場所になっています。



うばがたけじんじゃ

📷 姥ヶ嶽神社

平（びら）の権現さまとも称し、姥ヶ谷から登ること300mにある鏡洲九平の森厳な山中に鎮座しています。創建は不明ですが、一説には500～600年以前から祀られていると伝えられています。

祭神は、建御雷命（たけみかずちのみこと）など5神で、戦前には出征兵士の武運長久の祈願がなされました。

まるのじんじゃ

⑨ 丸野神社

加江田溪谷への入り口、鏡洲丸野にあります。
先祖代々この神社を祀る川添家によれば、以前は伊豆で伊東氏に仕えていましたが、伊東氏の日向下向に従ってこの地に移り住んだ際、開拓・五穀・国土経営の神である大国主命（おおくにぬしのみこと）を祀ったと伝えられています。
江戸時代には、飢肥藩主から社禄を給せられ、社殿の向拝柱には雲龍の彫刻が施されています。



えんなんじ

⑩ 円南寺

飢肥の曹洞宗長持寺の末寺で、創建は不明ですが、かつては日向七堂伽藍の一つに数えられ、安産の観音様として知られていました。
江戸時代は、飢肥藩主から寺禄18石を給され、崇敬を厚く受けていましたが、明治5年（1872）に廃仏毀釈によって廃寺となりました。明治14年（1881）に復寺後は、宮崎市の帝釈寺の末寺となっています。
堂内には、天正10年（1582）に少年使節としてヨーロッパに渡った伊東満所と伊東家累代の位牌が安置されています。また、円南寺の山門と境内には仏師串間円立院の作とみられる仁王像と地藏菩薩坐像があります。



おびかいどう

⑪ 飢肥街道

飢肥街道とは、飢肥城から清武城を結ぶ山仮屋越えの街道のことです（佐土原まで含める説もあります）。平部嶺南の『日向地誌』においては、木原村では飢肥街道と称し、鏡洲村では志布志街道と称しています。
現在の県道宮崎北郷線は明治以降に開削されたもので、飢肥街道とは場所によって大きく離れますが、飢肥城下から山仮屋、椿山峠、九平、塩鶴を通り、瀬田峠をぬけて木原に至ります。
九平を過ぎて1km下った道路脇に道標があり、「清武へ壱里三拾四町四拾六間」と記されています。